



連載執筆者交替に寄せて

西村秀一

独立行政法人国立病院機構仙台医療センター臨床研究部ウイルスセンター長

1 連載の執筆者交替について

昨年6月ころ、本連載「地域のパンデミックプランニング」(以下、「地域のプランニング」)の連載の継続が危うくなっていた。これまで連載を引き受けてくださっていた三重大学の田辺先生が県行政に転身されるため筆をお返したいとのことで、後を託すことのできる人材を探す必要に迫られていた。だが、新たな引き受け手を探すのはそう簡単なことではなかった。ただ、15年の長きにわたってつないできたものをここで止めるのは忍びなく、適切な執筆者が得られるまで「一時休止」ということで編集部と話がまとまり、その寸前であった。ところが、先日たまたま別件で田辺先生の前執筆者であった清水先生とメールで連絡を取り

合う機会があり、思いつきで再登壇をお願いしたところ、快諾を得たのだった。本年6月号から清水先生による再連載が始まる。読者の中にはこの連載を最初から読まれている人は、むしろ少数であろう。そこで、これを機に本稿で改めてプランニングの意義を考え、これまでの51回の連載を短く振り返り、今後新たに踏み出す一歩としたい。

2 あらためて「地域のプランニング」とは？

これは、わかっているようでわかっていない。そもそも「地域」の定義が人の立ち位置で違ってくる。単位として地域コミュニティ、小～中規模自治体、大都市、県いろいろあり、それぞれについて考える必要があり、さらに

はそれぞれの地域の特殊性に基づく具体的各論がある。ただ、それらが個々バラバラに勝手なことをするのではなく、とくに下位の単位のプランは上位のそれと矛盾しない必要がある。

また、プランニングは何を対象にするのかも明確にすべきである。それによって対応は当然異なる。日常生活の範囲内あるいはそこからの工夫でカバーできるものもあれば、緊急事態として、日常生活とは異なる新しいことをしなければならぬ場合もあろう。そうした場合分けを含めて広く考えるには、時間がある。事が起きてからでは間に合わない。まだ事が起きていない時間があるうちから考えていこう、というのが本連載の趣旨である。